

# 芥川龍之介「煙管」論 ——權威の相互的確証とその解体——

倉井 香矛哉 Komyu Kurai

はじめに

短編小説「煙管」は、一九一六（大正五）年十一月発行の「新小説」第二一年第一一号に掲載された。「加州百万石」の藩主・前田齊広が所有する金無垢の煙管をモチーフとして、自意識の悲喜劇や「虚栄心」のはかなさを描いている。

発表当時、一連の芥川作品の評価は高いものとはいえなかった。そのためもあつてか、「煙管」の同時代評は数えるばかりしかない。たとえば広津和郎は、「この作では私の期待したやうなものは何もなかつた。唯何か或る興味を人生から発見して、それを話上手に語つてゐるに過ぎない」として、「悪い意味の才気のあらはれ」と酷評した。また、この作品を単独でとりあげた作品研究は管見のところ皆無といつてよく、わずかながら、作家の同時代作品と関連づけるかたちで言及されるばかりである。

「煙管」を対象とする作品研究がいまひとつ盛り上がりを見せない理由のひとつとしては、作者自身による評価が低いことがすくなくからず影響していると考えられる。同年十一月四日の岡栄一郎宛書簡において、芥川は、「あれはいくら己惚の強い私でもないとは思ひませぬ尤も悪口を云はれれば腹も立つかも知れませぬが」と（既成文壇の批判に対する反発の一端を垣間見せつつも）この短編

への愛着がそれほど高くないことを書き記している。この記述は、作品そのものが現実における作者の苦悩や実存的な生きにくさの反映に乏しいことも相俟つて、作家論的なアプローチにおけるこの作品の位置づけに影を落していると思われる。同じように発表当時は黙殺されるに等しい扱いを受けていた「羅生門」が今日では芥川研究における中心に据えられていることを考慮しても、同時代の評価の低さだけでは「煙管」論の低調ぶりを説明しきれない。

しかしながら、同時代評および作者自身の評価をいったん括弧に入れたうえで、文学史において固定化されている芥川龍之介のイメージから独立したテキストとして読みなおすとき、「煙管」は、徳川幕府という既成権力の構造を編成する各個人の相互的確証と、それが解体される過程を近代の事後的な視点から語るものとしての価値づけが可能であると考えられる。本論では、この作品の物語言説を分析することによって、その背景に伏在する権力構造の問題を明らかにしたい。

## ・時代設定

物語世界の時代設定は江戸末期、おそらく文化年間を想定していると考えられる。実在した加賀藩第一二代・前田齊広が藩主となつたのは一八〇二（享和二年）三月のことであり、藩の財政改革を推進した意欲的な統治者であつたと記録されている。一八一（文化八）年の改作方復古、一八一三（同一〇）年の産物方という農業政策および商品生産の両面を推進していく政策がとられるいっぽうで、十村投獄、農政機構の改革、竹沢御殿での教諭局の設置など、破産的な藩財政を打開するための政策を行つたと考えられるが、彼の治世中には一〇件ばかりの打ちこわし、愁訴、

1 広津和郎「十一月文壇——創作及び其他」『時事新報』時事新報社、一九一六（一）